「古今和歌六帖の出典未詳歌」

――万葉から古今への資料として――

安藤和幸*

要旨

『古今和歌六帖』の出典未詳歌から万葉集にさかのぼると思われる古歌を選び出して、類歌と相聞歌の多い特徴を述べた。

一　はじめに

島田良二氏が『平安前期　私家集の研究』で、家持集の出典不明歌は古歌集に拠ることを述べこう説く。

「こういう古歌集は、当時かなり何種類もあったと思われる。それを裏付ける資料としては、伊勢集・素性集の巻末に付された出典不明、読人しらずの古歌群である。これらは、勅撰集に読人しらずとして入集する資料となったと推定されるとともに、当時の伝承的に伝えられた和歌の流れを示すものである。いわゆる口承和歌で、古今集の中にとられた読人しらずの歌の流れと同じものである。それらの民間の謡われた和歌の数多くが、後撰集時代に文字に定着し、小さな私撰集として編集され、それが古今六帖の大成を促したのであろうと思われる。もちろんそれは、歌合の隆盛に伴ない、題詠の必要上から古歌の知識が要求されたからであろう。それが万葉集訓読を契機に人麿集・家持集・赤人集（もちろんこれらは、万葉集の撰抄の形で編まれたのが、後に人麿・家持・赤人という個人の集としてすりかえられたのであるが）が編まれ、それに伴なって一般の歌人の関心の対象となって無名撰集が流布したであろう。」

古今六帖の編集が時の要請、「古歌の知識が要求された」ことによるものであることは、次の例で窺い知る。

六帖の編者に推定されたりする源順の家集にも載る「天禄三年八月廿八日規子内親王前栽歌合」でのこと。「虫の音」の題で左方の但馬の君が「浅茅生の露吹きむすぶ木枯に　乱れてもなく虫の声かな」と詠み、右方橘のまさみちの歌があり、判者順は左方の勝としたのにまさみちが異議を申し立てる。「木枯とは冬の風をこそいへ、このごろの風をいはば、雨をも時雨とやいふべからん」。すると御簾の内の女房達が、「かかることは古き言をこそはためしにせめ」と言い二首「木枯の秋の初風吹きぬるに　などか雲居に雁の音せぬ」「我かどのわさ田の稲も刈らなくに　まだき吹きぬる木枯の風」を上げ、「などいへるは、冬の嵐を秋のはつ風といへるにやあらん」とした。

この天禄三年から数年して六帖は編まれるが、二首の前の歌が第一帖「初秋」に載る。

---

*　一般教科（国語）

さて、島田氏は古今集読人しらずの歌を「伝承的に伝えられた和歌の流れ」「いわゆる口承和歌」であり、「後撰集の時代に文字に定着し」たとするが、『古今集の世界』で小沢正夫氏は、

「古今集の読人しらずの歌でしかも題しらずの歌は当時世に古くから歌い伝えて来て行われていた歌謡特にその大部分は民謡であったもので、書物から引き抜いたのはむしろ例外であったと思われる」とする「安田喜代門氏（『古今集時代の研究』）のような考えも可能であろう。しかし、その反対に、読人知らずの歌は『古今集』に採られる前からすでに書物に定着していて、そういう書物から『古今』に入ったとも想像することができよう。」とした。これを受け更に、『万葉集の歌人と作品（下）』で伊藤博氏は、

「元来伝誦に基づく歌が実際にあったとしても、読人知らずの歌は、古今編者にとって、巻二十のような不特定多数の歌（口承の歌）ならぬ記載の歌（書承の歌）と考えられていたものと見なければなるまい。」とする。

そして、小沢氏も伊藤氏も古今集真名序に言う「古来よりの旧き歌を献らしめ」た、その中に読人知らずの歌を収めた歌集、〝古歌集〟を想定する。

伝誦がよく問題になる古今六帖も同様であった。既に書き留められていた古歌集が資料に用いられていた。

そこで六帖の出典未詳歌から、こうした古歌集に拠ったと思われる歌を洗い出してみたのが今回の主眼である。古今集の読人知らず歌の解析に先学が行ったように、万葉歌との類似を求めることで進めた。しかし、貫之を始めとして古今集の撰者達が万葉歌を摂取していることからすると、万葉歌と類似する歌が必ずしも古歌でないことや、実際古歌であるかの判定は難しく、多分にあやふやなのであるが、万葉集から古今集の間を伝える資料としての重要さを思えば、今後に正されていくことを願ってささやかな試みを示してみるものである。

二　出典未詳歌の概観

続国歌大観に載る六帖の歌に図書寮叢刊（宮内本）と国歌大系に見る歌を加えると四七九一首になる。他に拾遺歌として四七首あるが、これは調査の対象から外した。

このうち現存の諸資料で出典を見ない歌は一一四六首（うち重出する歌二三首）ある。拾遺集以下の二十一代集の読人知らず歌や、新古今集以下六帖から採歌の際作者表記を誤まって載せる歌や、六帖が作者表記をして出典を見い出せない歌を含めている。

まとまったものとしては第四帖「女をはなれてよめる」のもとに、紀友則、在原ときはる（滋春の誤記であろう）、紀貫之、凡河内躬恒が十首ずつ読み連ねた歌四十首がある。

他、平安朝歌人の名で示される七八首。内訳は、貫之四十首、素性一八首、躬恒五首（うち一首重出）、忠房三首、忠岑と伊勢が二首、兼盛・兼輔・滋春・深養父・業平・興風が一首ずつ。第二帖「あま」に斎院と示される一首。この「斎院」は『大和物語』四九段、五一段に「斎院のみこ」「斎院」として見える宇多帝皇女君子内親王を指すのか。又、第四帖「雑の思」に東三条右大臣と示される一首。この名第六帖「むめ」にもある。「むめ」の歌は古今集三六番東三条左大臣（源常）の歌で、この歌と重出している第二帖「おきな」では東三条左大臣として載る。「右」は左の誤記であろう。

この四十首と七八首、ほぼそれぞれの歌人の歌であろうと思われる。

語句の意が取れない歌が一二首。二首が一首と混入した歌かどうか、転化と見るかどうかの認定をめぐり一一四六首の数は変わってくるが、疑わしい一つ一つの検討は省略し、古体に関わる歌についてだけ見て行きたい。

さて右の一三〇首を除いた一一〇六首について次のA～Dの四種に区別してみた。

表一　出典未詳歌内訳

注1

	A	B	C	D	作者注記	歌意不明	計
一	10	14 [1]	85 [-3]	32	11 [-1]	1	153 [-5]
二	12 [-2]	32 [2]	131 [-7]	13	10 [-1]	3	201 [-12]
三	11	40 [-2]	134 [-8]	14	4	3	206 [-10]
四	3	7 [-2]	66	15	49	1	101 [-2]
五	14	77 [-5]	138 [-7]	21	10	2	262 [-12]
六	6	29 [2]	100 [-3]	12	34	2	183 [-5]
計	56 [-2]	199 [-14]	654 [-28]	107	118 [-2]	12	1146 [-46]

A　万葉歌との関わりが深い歌

B　古歌集に拠ると思われる古体の歌

C　古体を出て古今調に近づいている歌

D　古今集撰者の歌以後と思われる歌

各帖ごとの区分を表にすると上のようになる。

以下万葉集と同時代かそれに続く時代の最古層のA項歌、更に次の時代の古層のB項歌を想定し、古今集以前の資料として調べて行く。

三　六帖の万葉集歌と古歌

既に六帖に見られる万葉歌については、平井卓郎氏の『古今和歌六帖の研究』があり、万葉集歌に該当する六帖歌の全てが示されている中西進氏の『古今六帖の万葉集』、渋谷虎雄氏の『古文献所収万葉和歌集成　平安・鎌倉期』があって大きな裨益を得る。

しかし、少なからず万葉集と六帖が伝える万葉歌との間には歌によって語句の異なりが見られ、梨壺の五人による古点作業を経ているにも関わらずどのような事情によるのか難しい。大久保正氏が『万葉の伝統』で、「本来万葉集から直接採歌せられたものではなく、六帖編集当時伝承してゐた歌によつて採られたもの」「伝承歌を源泉として六帖に採られたもの」とし、「これらの伝承歌は伝承されるうちに、自づから変貌して時代の好みに合つた姿となり、平安時代の新しい歌風を培養する力となつたことが想像される。」とした。この伝承については、古今集の成立時には、先に見たように口承によるものでなく書承によるもので、いくつかの古歌集が伝えられていたと考える。人麿集は既にあり、六帖の成立時には赤人集・家持集があった。六帖を繙くと最初に赤人の注記で載る二首は、実は万葉集巻十の作者未詳歌であるが、赤人集を出典としたからであろう。このことは人麿注記についても言えることで、六帖全体で人麿注記の歌一三〇首中、万葉集作者未詳歌であるものが三一首、このうち人麿集に見るものは類歌一首を含めると二二首、赤人集に見るもの一首、残るのが八首である。一方、人麿注記があって万葉集や古今集にない歌が二二首あるが、うち人麿集私家集大成Ⅱ本に見る歌が一四首、Ⅲ本だけに見る歌が三首あり残り五首ある。この八首と五首の歌、六帖注記の誤りを疑えなくはないが六帖採歌の人麿集に見えていた歌であったと思われる。

さて、伝承歌経由で採歌された六帖の万葉歌について大久保氏は更に一歩立ち入って「伝承されるうちに、自づから変貌して時代の好みに合つた姿となり」と言うのであるが、検討の材料として伊勢集の古歌を取り上げてみる。この伊勢集の古歌に見る万葉歌六首は、たまたま六首とも六帖にも見えている。伊勢集は私家集大成Ⅰ～Ⅲ本、万葉集は塙書房本、勅撰集は新編国歌大観、夫木和歌抄は『作者分類夫木和歌抄』、六帖は続国歌大観により、宮内本を傍書きして示すこととする。

1　伊勢集Ⅰ本　（Ⅲ本ナシ）

わかせこをならしの山（Ⅱ本に岡）の呼子鳥
妹（君）呼びかへせよのふけぬとき

人麿集III本・赤人集I本＝夫木抄赤人

わかせこをならしのやまの呼子鳥（岡人まろII本）

君呼びかへせよのふけぬとき（まに　赤人II本）

拾遺集八一九　山辺赤人　人まろII本に同じ

拾遺抄二九七　赤人　赤人II本に同じ

六帖五　人をとどむ　赤人きの女郎とも

わかせこをならしの（こ　宮内本）山の呼子鳥

君呼びかへせよのふけぬとき

万葉集10一八二二　作者未詳

わかせこをなこし（せ大観）の山の呼子鳥

君呼びかへせよのふけぬとに

なお「ならしの岡」は万葉集一例しか見ないのであるが、六帖では次のように見る。

六帖五　人づて

ふるさとのならしの岡の時鳥（に拾遺集）

言づてやりきいかに告きや（つげ方　し万・抄・夫木）

万葉集8一五〇六　大伴田村大嬢、妹坂上大嬢に与ふる歌

拾遺集一〇七七　坂上郎女につかはしける　大伴像見

拾遺抄四〇四　坂上郎女につかはしける　大伴田村御女

夫木抄　よみ人しらず

六帖六ほととぎす　＝家持I II本

神なびの（ものふの宮内本）磐瀬のもりの時鳥

ならしの岡にいつか来鳴かむ（いたくなきそ我こひまさる　宮内本）

＝新勅撰集一四五田原天皇＝夫木抄志貴皇子（宮内本は六呼子鳥＝万葉集8一四一九の歌と混同している）

万葉集8一四六六　志貴皇子

神なびの磐瀬のもりのほととぎす

毛無（けなし）（ならし　大観）のをかにいつか来鳴かむ

2　伊勢集I本　（III本ナシ）

山（玉II本）かはにさらすてつくりさらさらに

昔のいもよ恋ひらるるかな（むかし恋しきやなぞ　II本）

六帖五　布＝拾遺集八六〇　読人しらず

玉川にさらすてづくりさらさらに

昔の人の恋しきやなぞ（いもが宮内本）

万葉集14三三七三＝夫木抄

たま河にさらすてづくりさらさらに

なにぞこのこのここだかなしき（ろ夫木）

3　伊勢集I・II本

やましろのいはたの森のははそはら

見つつや妹がいへぢゆくらん（かつしや　いつち　III本）

六帖六ははそ　式部卿宇合（宮内本注記なし）

山しろの岩田の森のははそはら
　見つつや君がひとり越ゆらん
新古今集一五八七　式部卿宇合＝夫木抄
山しろの岩田の小野のははそはら
　見つつや君が山路越ゆらん
万葉集9一七三〇　宇合卿
山しなのいはたの小野のははそはら
　見つつか君が山路越ゆらむ（や大観）
なお中西氏・渋谷氏は重出歌として
六帖二　もり　紀らう女
山城のいはたのもりのははそはら
　いはねど秋は色つきにけり
を上げる。この歌夫木抄では紀郎女と読人しらずで重出し、共に第五句「色にでにけり」読人しらず歌では第三句「かしはばら」を作る。後にも同様の例を見るが、「色づきにけり」は万葉集に十六例もあり伝承歌の性格を色濃く表わしている。こうした歌は、万葉該当歌としてでなくA項歌として扱う。

4　伊勢集I本
かすがののなかのあさがほおもかげに
　見えつついまもわすられなくに（いもか）（ぬかな）II・III本
六帖六あさがほ　家持＝夫木抄
春日野の野へのあさがほおもかげに
　見えつつ妹は忘れかねつも
万葉集8一六三〇　反歌家持
高まとの野への容花（かほばな）面影に
　見えつつ妹は忘れかねつも

5　伊勢集I・II本
いはしろの野中の松をひきむすび
　いのちしあらばかへりきてみむ（みよ）III本
（III本左注　是はありまのわうしのつみせられける時によめる）
六帖五　昔をこふ　ありまのみこ
岩代の浜松が枝を引き結び
　まさきくあらば又返りこむ（まとさち）（みむ）宮内本
万葉集2一四一　有間皇子
いはしろの浜松が枝を引き結び
　まさきくあらばまたかへりみむ（まさしく）夫木
6　伊勢集I・II本
夕やみはみちたどたどし月まちて（されば）III本
　かへれわかせこそのまにもみむ
六帖一　夕やみ　大宅娘女
夕やみはみちたどたどし月待ちて（されば）新勅
　かへれわがせこそのまにもみむ
新勅撰集八八一　よみ人しらず
万葉集4七〇九豊前国娘子大宅女
夕やみは道たづたづし月待ちて

いませわがせこそのまにもみむ

例4で「高まと」が「春日野」に、「かほ花」が「あさがほ」に、例6で「たづたづし」が「たどたどし」に、「いませ」が「かへれ」と変化している点「時代の好みに合つた姿と」なったことは認められる。それにしても六首とも語句の異同の著しいことが特徴となっている。例2の歌では下句が大きく変化している。更にこうした例を以下に見てゆこうと思うが、ここではわずか六首であるが諸本での異なりはそのまま六帖全体にいえることで、六帖に見る歌は、六帖に採歌されるまで、時には採歌されたあとも、伝え受け継ぐ過程で語句の動揺は避けられなかったのであり、一字一句ゆるがせにせず忠実に転写していくことは望めなかった、こうした事情での語句のぶれが六帖本文の基本的性格であると理解しておきたい。

又一方では誤った訓みもある。万葉集での「隠妻（こもりづま）」「隠沼（こもりぬ）」「隠口（こもりく）」を六帖で「隠れ妻」「隠れ沼」「かくらく」と訓むのは、「時代の好み」故の改変ではなく誤った訓みをしたためと思われる。「かくれぬ」は、古今集で二首の歌に見られ、友則と忠岑が詠んでいる。

他地名の「是川（うぢかは）」を「このかは」と、「泊瀬（はつせ）」を「とませ」と訓んでいる。枕詞では「使ひ」にかかる枕詞「たまつさの」を六帖二「使ひ」では「たまほこの」と誤っている。もっとも万葉集でも12二九四五では「玉梓」を「玉桙」と誤まって伝え、転写しても読み取りにしても紛らわしかったようである。人麿集でも10二一一一の歌の「玉梓の君が使」を「たまほこの」としてある。もう一つ「玉蜻・玉蜻蜓（たまかぎる）」が「かげろふの」と訓まれている。第一帖「かげろふ」に載る九首、後撰集よみ人しらず歌、古今集よみ人しらず歌に続いて七首出典未詳歌があるが、最初の三首は古歌であろうと思われる。すると万葉表記の誤読はかなり早い時期から行われていたことが考えられ、万葉歌の口伝えの伝承が広く行われていたのなら起らなかったことで、むしろ口伝えの伝承は多くなかったのではないだろうか。

「時代の好みに合つた姿」への変化が際立つ例を次に上げる。

7　第三帖浜千鳥

よもすがら寝覚めて聞けばかみつ瀬に
　心もしのになく千鳥かな

万葉集19四一四六　大伴家持

よぐたちに寝覚めて居れば河瀬とめ
　心もしのになく千鳥かな

次の歌は、変化したといえるのかどうかとまどってしまう例である。

8　第一帖なこしのはらへ

たつた川たきのせきりにはらへつつ
　いはふ心は君がためとぞ（いはひくらすは　宮内本）

万葉集10二四〇三　人麻呂之歌集出

たまくせの清き川原にみそぎして
　いはふ命は妹がためこそ

四　A項歌について

万葉歌の上句や下句を同じくするもの、時に二首が一首に混入したものもある。こうした歌、伝承過程で少しずつ変化していったものか、「時代の好みに合つた姿」に改変されて伝えられたものか、それとも既にある歌を念頭に置いてその場にふさわしく詠まれたものか判断しにくい。既に六帖

編集の段階では古歌集にもられていて、大体において資料に忠実であったと思われる。

さて、万葉歌の上句や下句を同じくするもの、時に二首が一首に混入した歌はA項目で扱ったが、中西氏や渋谷氏の万葉集該当歌であるとする歌も含まれたりする。三例示す。

9　第一帖照る日

筑波嶺の岩もとどろに（宮内本雲けふまでに）
　照る日にも我が袖ひめや妹にあはずて
　万葉集10一九九五　作者未詳　あふまで　宮内本
みな月の土さへさけて照る日にも
　わが袖ひめや君にあはずて

第一帖「みな月」に人丸或本の注記で載り、第五句「妹にあはずて」となっている。拾遺集八二五読人しらず、人麿集Ⅰ～Ⅲ本、赤人集Ⅰ本にもあり、いずれも「妹」となっている。

又、万葉集14三三九二

筑波嶺の岩もとどろに落つる水
　よもたゆらにわが思はなくに

この歌第三帖「水」にあり、第四句「たえむものとは」となっている。

更に、万葉集12二八五七　人麻呂之歌集出

菅の根のねもころごろに照る日にも
　ひめやわが袖妹に会はずして

10　第二帖鹿　人まろ　又夏の野人まろ

夏野行くをしかの角の束のまも
　見ねば恋しき君にもあるかな
　万葉集4五〇二　柿本人麻呂

夏野行くをしかの角の束のまも
　妹が心を忘れて思へや

人麿集Ⅰ～Ⅲ本下句「忘れで（Ⅱ本忘れず）思へ妹が心を」、新古今集一三七三人丸はⅡ本と同じ。

次の例は特に伝承の揺れをよく伝える例である。

11　第二帖山

飛鳥川もみぢ葉流る葛城の
　山には今ぞしぐれふるらし
　万葉集10二二一〇　作者未詳

明日香河もみち葉流るかづらきの
　山の木の葉は今し散るらし

家持集Ⅰ・Ⅱ本第五句「いまか散るらむ」

古今集二八四　読人しらず

立田川もみち葉流る神なびの
　三室の山に時雨降るらし

又は「飛鳥川もみち葉流る」

拾遺集二一九　柿本人麿

竜田川もみぢ葉流る神なびの
　みむろの山に時雨降るらし

第六帖「紅葉」に人まろの注記であり、人麿集Ⅰ～Ⅲ本、大和物語百五十一段人麻呂と見える。

新古今集五四一　人麿

飛鳥川もみぢ葉流るかづらきの
　山の秋風吹きぞしぬらし

万葉該当歌とされていないが、同様な例で二首ある。

12　第一帖時雨

時雨の雨まなくし降れば神なびの
　森の木の葉も色づきにけり

万葉集10二一九六　作者未詳

時雨の雨まなくし降れば真木の葉も
　争ひかねて色づきにけり

人麿集Ⅰ・Ⅱ本にあり、新古今集五八二人麿として載る。

13　第六帖あさぢ

時雨のみまなくし降れば春日野の
　浅茅の色も移ろひにけり

A項に入れた歌で、中西氏が万葉該当歌とする歌は、先に例3の歌の所で示した第三帖「もり」紀らう女の歌と例9・10・11の他次のように六首ある。六帖の数字は続国歌大観の通し番号の下二桁の数字を記した。

第二帖原09（万葉集六八八）　第三帖あま26（以下万葉集略上句三八九九　下句三〇〇三）　同藻03（三九九四）　第四帖たび62（三二三七）　第五帖めづらし96（五二二）第六帖千鳥99（二六八〇）

中西氏が関連深い歌として第二部に示した歌が八首。

第一帖雑の月28　第二帖戸31　第三帖川00　第五帖知らぬ人75　同家とうじを思ふ32人麿　第六帖山ざくら63　同つる95　同千鳥96

一例に「山ざくら63」の歌をとり上げてみる。

14　山もよに咲ける桜の憎くからぬ
　妹に逢ひ見て恋ふる頃かも

類似した万葉歌、8一四二八（長歌末）　作者未詳

山もせに咲けるあしびのあしからぬ
　君をいつしか行きてはや見む

家持集では第二句「咲けるつつじのにくからぬ」とある。

万葉歌上二句が「あしび」の「あし」の同音の繰り返しで「あしからぬ」にかかる序詞を作っているのに対して、家持集では「つつじ」の花のようにいとおしい君としている点序詞が質的に大きく変化している。このように変化した歌が更に六帖の歌のように読み替えられていったと思われる。なお六帖の「よに」はもと「せに」とあったのが写し誤られて伝わったのであろう。

又、類似した歌。

万葉集10一九二六　作者未詳

春山のあしびの花のあしからぬ
　君にはしるやよそるともよし

同11二六〇五　作者未詳

玉ほこの道行きぶりに思はぬに
　妹を相見て恋ふる頃かも

A項歌五六首の残る三五首を次に示す。

第一帖七日の夜15　照る日59　雑の月16　秋の風81と82　雨20　雲12人麿

第二帖山田40　原12山上憶良　みち64と68　つかひ71　国32

第三帖すずき78　川97と98と17　沼42　浦30　貝49　浜千鳥82

第四帖たむけ46　たび63

第五帖相思ふ62　相思はぬ73　二人をり63　年隔てたる25　うちきてあ

へる42　めづらし93と94と95　家とうじを思ふ39　人をとどむ96　わぎもこ36

第六帖山吹62

五　B項歌について

次にB項「古歌集に拠ると思われる古体の歌」であるが、A項歌同様、万葉集歌と語彙・語句・発想を同じくする歌を選んでいったが、万葉集では見られなかった語彙が入り込んでいる点A項歌と異なる。例えば、

15　第六帖千鳥99

川千鳥住む河のうへに立つ霧の（宮内本）

まきれにたにもあひ見てしかな

中西氏、渋谷氏は次の万葉集11二六八〇の作者未詳歌を該当歌とする。

河千鳥住む沢のうへに立つ霧の

いちしろけむな相言ひそめてば

「紛れ」の語は万葉集になく、古今集で遍昭の歌で「花のまぎれ」で一例ある。古今集寄りの歌のようであるが、「まがひ」という語が万葉集で四例、紅葉・秋萩・春の花の「散りのまがひ」と固定して使用され、古今集でも一例同様に「桜花散りのまがひ」（七二　読人しらず）で使われている。この「まがひ」が万葉集にあること、「あひ見る」が万葉集で多用されていることからA項歌で扱ったが、次の歌の下句は万葉歌より古今歌に近づいていて、B項歌で扱う。

16　第五帖玉だすき64

玉だすきかけねば（宮内本）くるしかけたれば

あなわづらはし人の心や

万葉集12二九九二　作者未詳

玉だすきかけねば苦しかけたれば

継ぎて見まくの欲しき君かも

17　第二帖うま87

ませ越しに麦はむ駒のはつはつに（はるばるに　宮内本）

及ばぬ恋も我はするかな

万葉集14三五三七

くへ越しに麦はむうまのはつはつに

相見し子らしあやにかなしも

或本歌

うませごし麦はむこまのはつはつに

にひ肌触れし子ろしかなしも

古今集古歌との間にも類似を見る歌がある。

18　第二帖森28（宮内本おほとものらう女）

いとはやも鳴きぬる雁かこがの森

木に這ふつたも紅葉あへなくに

古今集二〇九

いとはやも鳴きぬる雁か白露の

色どる木々ももみぢあへなくに

この歌第六帖かり98にある。

六帖には次のような類似歌がある。

第五帖衣16

いと早も鳴きぬる雁の古衣
　改めきせむ妹もあらなくに
「こがの森」は万葉集、二十一代集に見えないが六帖に別に一例見える。
　第五帖人をよぶ
打ち群れて来む人はなほこがの森
　木々の紅葉のまだ散らぬまに
参考となる万葉歌がある。20四二九六　中臣清麻呂
天雲に雁ぞ鳴くなる高まとの
　萩の下葉はもみちあへむかも

19　第二帖秋の田94（宮内本そせい）
我が門の早田もいまだ刈り上げぬに
　今朝吹く風に雁は来にけり
　古今集二〇八
わが門にいなおほせ鳥の鳴くなへに
　今朝吹く風に雁は来にけり
この歌第二帖いなおほせ鳥05人まろ注記で初句「わが宿に」として載る。
現存の人麿集になく、猿丸集には見る。
　古今集異本所載歌一一一八　読人しらず
わが門の早稲田の稲も刈らなくに
　まだき移ろふ神奈備の森
　第二帖もり36　いべのおとくろまろ
わが門の早稲田もいまだ刈り上げねば
　かねて移ろふ神なびの森
この歌は家持集に見える。
又、はじめに見た順集に載る古歌
わが門のわさ田の稲も刈らなくに
　まだき吹きぬる木枯の風
万葉集一五六六家持の歌で「早稲田」と「雁」が取り合わせて詠まれている。以前例17の歌を二首が一首に合わされた歌のように考えたが、そうではなく例16の歌も、多くの類歌を持つというのは伝承歌であるということだろう。次の三首も同じ性格の例と見る。

20　第五帖初めてあへる22
足曳の山下とほる月影に
　あかずも人に逢ひ見つるかな
　古今集六四八　読人しらず
さ夜ふけて天の門わたる月影に
　あかずも君をあひ見つるかな

21　第五帖人を待つ78
行く水の影やは見ゆる片岸の
　まつは苦しきものにざりける
　古今集七七八　読人しらず
久しくもなりにけるかな住の江の
　まつは苦しきものにぞありける

22　第六帖しぎ16
暁の鴫のはねかき百羽かき
　かき集めてぞわびしかりける
　古今集七八一　読人しらず＝しぎ13

暁の鳴のはねかき百羽かき
　君が来ぬ夜は我ぞ数かく

由緒・伝説が知られる、あるいは関わると思われる歌もある。

第五帖玉くしげ95

水の江の浦島の子が玉匣
　あけざらませば妹に逢ひなまし

『丹波風土記』逸文に下句「あけずありせば又も逢はましを」とあるのを該当歌としたが、この浦島伝説にかけたB項歌と見る一首がある。

23　第三帖舟73　さみませい（一首後に彼の万葉歌がある。誤って紛れ込んだものであろう。）

水の江の浦島の子が釣舟も
　同じ浦にぞ三年こぐてふ

24　第三帖橋68

津の国の難波の浦の一つ橋
　君をしもへば（君をおもえば　宮内本）あからめもせず

『摂津風土記』逸文に

津の国の難波掘江の一つ橋
　君渡らさばあからめなせそ

とある歌が見られる。この歌が変化したものとも考えられるが、B項歌で扱った。

25　第三帖しほがま53

陸奥の千賀のしほがまちかながら
　はるけくのみも思ほゆるかな

『和歌童蒙抄』は下句「からきは君にあはぬなりけり」として、「陸奥国風俗」に見るとして昔物語を伝えている。『袖中抄』には「からきは君にあはぬなりけり」として、傍書で「イはるけくのみもこひわたるかな」を記す。続後撰集七三三　読人しらず歌には「からきは人にあはぬなりけり」で載る。

26　第三帖鯛81

逢ふことを阿漕の島に曳く網の（たひ　宮内本）
　たび重ならば人も知りなむ

「あこぎ」の語源の歌として知られるが、辞書によっては伝説に拠った歌と説かれるが、正しくはこの歌により謡曲『阿漕』が作られ、物語が伝説化していったものである。古い時代層に属する歌かどうかはっきりしないのであるが、「鯛」は古今集後撰集では用例がなく万葉集に二例見える点でB項歌とした。

27　第二帖かね98

宵の鐘つかざる先に湯あみよと
　云ひてし物を耳つまなくに

『袋草紙』に「沐浴間槌ゝ鐘誦文歌」として下句「耳つまなくに言ひてしものを」とあり、小沢正夫氏らの『袋草紙注釈』によると『日遊』（九七〇年成立）に既に載っているという。古くから言い伝えられた歌と見なした。

28　第三帖いを73

渡つみの神のしまける魚故に
　漕ぎな疲れそあまの釣舟

「神のしまける」が解けないのであるが、個人の抒情の域を超え神の威光をこめている点、かなり古い時代層のものでないかと思われる。こうした例もう二つ考えられる。

29　第五帖紅29と30

誰が蒔きし紅なれば三輪山を
　ひた紅に匂はせるらむ
隠らくのとませの山をすそへらと
　豊すめ神の蒔きし紅

これは一対の贈答歌であろう。「すそへらと」が解けないが、「隠口乃泊瀬山」といった表記を誤って訓んだ、裏返すと万葉仮名表記で伝えられた古い資料が想定される。六帖の編者が訓みそこなったというのでなく、六帖には古歌として伝えられただろうが。

30　第二帖関02と03

八雲立つ出雲の国のてまの関（せきの　宮内本）
　いかなるてまに君さはるらん（なつけしよしもしられす　宮内本）
まてしばし人知りみむやわかせこを
　とどめかねてぞてまとなつけし
重第五帖ととまらす99
まてしばし人知りぬべみ我妹子を（わかせこを　宮内本）
　とどめかねてぞまとなりつけし（なな　宮内本）

B項歌は一括末尾に示す。

六　古歌の特徴

イ　歌の配列

六帖の各歌題のもとに並べられた歌は、厳密ではないのだが、万葉歌から古今歌、更に古今集以後の歌人の歌と古い時代順に並ぶよう配慮されている。従って大体において万葉歌は万葉歌でまとまり連続している。このことで出典未詳歌の時代層がより古いものであるかどうかを割り出す手がかりとなる。出典未詳歌の前後に万葉歌があれば、万葉歌に続く古い歌ではないかと疑えるのである。A項歌五六首の連接状況を表二に示す。A項歌が二首・三首と連接している場合、二首・三首の前と後で見ることとする。

まず万葉歌と連接しているのが三七首と圧倒的に多く⅔を占める。しかも、そのうち万葉歌にはさまれてあるのが最も多くて一三首あり、A項歌と万葉歌の強いつながりが配列の上でも見てとれる。配列の上で妥当しないのはわずか二首で、古今集藤原関雄の歌と貫之集に見る歌にはさまれた例9の歌、もう一首躬恒と貫之の歌にはさまれた第二帖みち64の歌だけである。

B項歌の連接はどうであるか、表三で見ると、やはり万葉歌と連接しているのが一一一首と半数を越え、万葉歌の前後にはさまる歌が二九首で最も多い。配列上妥当しない例は四首しかない。もっとも厳密に言うのなら、万葉歌の後に続くことはあっても間にはさまることはないのであるが、六帖の万葉歌は古歌集から入ったものもあり、古歌集に拠ったと目するA、B項歌と共に「古き歌」の理解が六帖の編者にあったことによるものと思われる。

又古今集に見る「古い歌」とは、題知らず読人知らずの歌について言われてきたのを、伊藤博氏は『万葉集の歌人と作品（下）』で、更に「万葉歌

の息吹をいまだ浅からず残す歌」を一三〇首選び出している。この一三〇首の歌、六帖に七八首、七首重出して八五首載る。この八五首の連接を調べて見ると表四のようになる。（　）の数字はB項歌の数である。A項歌は全く連接していない。やはり万葉集と強い関連があるのは、六帖の編者が「古き歌」の認定をしたことの表われであろう。しかし一方で、平安朝の歌人たちの歌にはさまれる歌が九首あり、必ずしも厳密ではない。

別に調べてみると、八五首全体の五分の一ほどの一八首が同じ古今集の歌で歌番が十番以内の近い位置にある歌と連接しているので、この古歌が古今集から六帖に採歌されているという当然の事実を得るのであるが、それ以外の経路を疑えないか。B項歌で伝説との関わりにふれたが、実は古今集九八二「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」の歌が、第二帖「かど」の最初に置かれて「みわの御」と注記

表二　A　項　歌　の　連　接

	万葉集	六帖未詳歌	古今読人不知	古今歌人	ナシ	
万葉集	13					
六帖未詳歌	7	5				
古今読人不知	1	1				
古今歌人	3		1	2		
ナシ	8	2		5		
家持人麿集	家2　人2			人1	家1	
他	後撰読人不知 1				大和物語古歌 1	
計	37	8	1	8	2	56
両接数	50	20	3	14	17	

表三　B　項　歌　の　連　接

	万葉集	六帖未詳歌	古今読人不知	古今歌人	ナシ	人麿集	
万葉集	29						
六帖未詳歌	24	6					
古今読人不知	15	6					
古今歌人	17	12	8	4			
ナシ	19	17		14	4		
人麿集	5		1	1			
後撰読人不知	1		4		4	1	
他	風俗歌 1		日本書紀 1	神楽歌 1　古今大歌所 1	催馬楽 3		
計	111	41	14	21	11	1	199
両接数	140	71	35	62	65	8	

表四　古今集旧来の古歌の連接

	万葉集	人麿集	六帖未詳歌	ナシ	古今読人不知	古今歌人	
万葉集	3						
人麿集	2						
六帖未詳歌	11（5）		6（5）				
ナシ	3	1	10（3）				
古今読人不知	4		1	1	1		
古今歌人	9	2	4	9	4	9	
後撰読人不知				1	1		
他	家持集 1				平中物語 1	新撰和歌 1	
計	33	3	21	11	7	10	85
両接数	36	5	38	25	14	47	

され、古今集九九四の長い左注を持つ歌「風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとり越ゆらむ」が、第一帖「さうのかせ」の最初に置かれて「かくやまのはなのこ」と注記され、又第二帖「山」に「かこのやまのはな子」と注記されていることは、古今集とは別の伝承歌として採歌されたことが考えられる。「古来よりの旧き歌を献らしめ」た古歌集が、古今集の成立から八十年ほど経ての六帖の成立まで伝えられ、六帖の古歌の資料となったのかどうか。表四で伊藤氏の言う「古来の旧歌」とB項歌が一三例連接することを知るが、B項歌にはさまる例が一例あるので一一例が並ぶ。これをもって出典を同じくする古歌集が考えられるかどうかであるが、古い歌は古い歌で集められる六帖の配列を考えると可能性は薄くなる。(注2)

ロ　枕詞

A項歌に十種一三例ある。全て万葉集に見る。万葉集にしか見ない枕詞は「玉きはる（命）」「鴉鳥の（なづさひ来）」の二例で、「あらたまの」を（年の緒長く）と受ける例も三代集には例がない。先にふれた「玉梓の（使ひ）」が「たまほこの」と書かれている。枕詞としての「玉づさの」は三代集に例を見ない。「玉ほこの（道）」が二例。三代集で四例、拾遺集の一例は万葉歌、拾遺集の二例が貫之歌。「唐衣（立田の山・立田の川）」と二例。「唐衣（立田の山）」は万葉集でも一例しなかく、三代集四例、後撰集貫之歌一例。「増鏡（見る）」一例は三代集四例、古今集一例貫之歌と、貫之の万葉歌受容の一端が知られる。他一例ずつ「ぬば玉の（夜）」「久方の（天てる月）」「足曳の（山田）」「隠沼の（下行水）」。「隠沼の（下）」は三代集三例見るが、（下行水）とするのは万葉集にも例がない。一三例の中で唯一つ従来の慣用表現から一歩わくを出ようとしている。こういう歌である。

第二帖沼42

隠れ沼の下行水の思ほえば

いかにせよとか我が寝そめけむ

「隠れ沼の下行水」として人目を忍ばねばならぬ恋が象徴として言われている体にしても古歌を疑うのであるが、「思ほえばいかにかもせむ」が万葉集に二例あり、下句11二六五〇と同じであり、古今集の古歌（六五〇）にも「いかにせむとかあひ見そめけむ」とあるのでA項歌扱いとした。

この規範を出てゆく例はB項歌で更に増加する。B項歌での枕詞は、二五種三九例を見るが、五種については他に例を見ない。

「墨染の（黄昏時）」が二例、「すすきの（穂に出て）」「鈴鹿川（音）」「片糸の（よらる）」「住吉の（岸・来し）」が一例ずつ。古今集の枕詞は、万葉集の五一九種に対して九六種、その中万葉集と共通に用いられているものは三九種、古今集独自のものが五七種あり、五七種中四九種が一回のみ用いられていて、社会性・固定性を本質とする枕詞から、一回的・個性的な枕詞への変遷を示していること、また四九種六九例中読人しらず歌が三五例と過半数を示していることが島田良二氏によって言われている（注3）。この一回的・個性的な枕詞は、万葉集で「山鳥の（を）」と固定しているのをB項歌では「山鳥の（ひとり）」、また「にはたづみ（川・流る）」を（ゆきゆき別れ）、「むらとりの（散々）」としている例でも知られる。しかし、一七種三〇例についてはいずれも万葉集からの枕詞が使われ、古歌の風体を表している。

ハ　序詞

A項歌に序詞は一八例。三二%と⅓ほどの数になる。しかも一八例中万葉集に上句同じ形で見るものが七例、既に使われている序詞が六例、類似しているもの二例、万葉集にある語句で序詞が作られているもの二例で、この二例を入れても独創の序詞は三首しかない。異った彩りの一首は次のようにある。

第二帖原12　山上憶良

名にし負へばいづれも悲しあさなあさな
なでておほししうなゐ子が原

どういう経路でこの歌が伝えられたのか、手がかりがない。類聚歌林が思い浮び、類聚集としての六帖であるだけに残念である。「名にし負はば」は万葉集に見えないが、「名に負ふ」は用例がある。いとおしい思いを「かなし」とするのも古い時代のものである。「あさなあさななでておほしし」が「うなゐ子」にかかる序詞。「うなゐ子が原」がどこを言うか明らかでない。他に例を見ないのであるが、後の時代『枕草子』「原は」に「うなひこが原」を見る。六帖のこの歌によったものであろう。

B項歌の序詞は重出歌二首を含め六七首に見える。三四％とやはり⅓ほどになる。上田設夫氏の『万葉序詞の研究』によると、六帖の万葉歌を中西進氏と同じく一二六五首として、うち序詞数を二一五六首、一三％と示す。万葉歌中の序歌の比率は一六％であるので二三％の高い率は六帖編者の序詞に対する関心の高さを思わせるが、上田氏は次の二点をあげて否定する。「二三％という序詞出現率は」、「六帖収録歌の多くが当時の伝誦歌である形跡が濃いからである。」「序詞の備える性格としての口誦性、民謡性と深く関連するところがあるから、このような口誦性を有する歌が多く採られるということは、当然そのなかにも序詞も多く含まれるということにつながってくるのである。」また、「類聚の形式をとる古今六帖は、伝誦歌のなかでも序詞を有する歌、換言するなら寄物陳思を多く採る必然性を備えていたということがいえる。序詞は歌の上の句に自然物を素材として詠じるのを基本的な形としているから、一首のはじめに歌われた素材は印象深く感受され、結果的に序詞が六帖に採択される機会が多かったと思われる。」

他に上田氏の言で注目させられるのは、万葉集全序詞七四五首のうち八割までが相聞の歌でしめられること、それも作者年代不明歌の民謡的性格を有する歌に多く、古今集は全序詞数一二二首、十一％の出現率を示すが、一二二首のうち六五首が読人しらずの歌であるとのことである。従ってA項歌、B項歌の序詞出現率三二％・三四％の高い数字は〝相聞歌で伝誦歌〟の性格を如実に示すものであると見ることができる。

伝誦歌の表われである類似性をいくつも指摘できるが、その一例を次に示す。

第三帖河05　（B項歌）

堀川のせきのゐ杭の打ち渡し
逢はでも人に恋ひらるるかな

「堀川」は平安京造営の際、人工に作られたことによりその名が付されたので、平安時代に入っての歌である。「堰杭」は六帖の次の歌の他、用例を見ない。「斎杭」は万葉集13三二六三の長歌に二例見られる。

第三帖ゐせき83　（B項歌）

大井川ゐせきのゐ杭打ち渡し
恋しとのみや思ひわたらん

第三帖つり86

伊勢の海のあまの栲縄（つりなは　宮内本）うちはへて
恋しとのみや思ひわたらん

この歌、次の古今集五一〇　読人しらず歌を該当歌とする。

伊勢の海のあまの釣り縄（たくなは一本）うちはへて
くるしとのみや思ひわたらん

「釣りなは」は古今集拾遺集に一例ずつ。「たくなは」は万葉集に三例、後撰集に一例ある。

第三帖海05　（B項歌）

伊勢の海の波間に下す釣りの緒の
うちはへひとり恋ひ渡るかな

「釣りの緒」は用例を見ない。

第三帖つり89　（B項歌）

磯なるるあまの釣り縄うちはへて
　くるしくもあるか妹にあはずて

第三帖たくなは33　（C項歌）

伊勢の海のあまの栲縄くりしあへば
　人にゆつらんと我思はなくに

第三帖たくなは34　（C項歌）

伊勢の海の干ひろ栲縄くりかへし
　見てこそやまめ人の心を

全て序詞を作り、相聞の歌となっている。

二　古歌の主潮である相聞歌

詠われている内容を見ていくと、A項歌は恋情を詠んだのが四三首七七％と圧倒的で、季節の訪れを詠んだのが四首、季節の推移を詠んだのが二首、夜明けの深山、河の瀬ごとに千鳥がしきりと鳴くとした自然景を詠んだものはわずかに一首よりない。これらを自然詠として合わせると七首一三％。

B項歌では、恋情を詠んだのが重出七首を含んで一六五首八三％と更に多くなる。季節の訪れを詠ったのが五首、花や紅葉を詠ったのが七首、鳥や蛙を詠ったのが五首。自然詠として合わせて一七首九％しかない。

又、親愛の呼称「妹」「わがせこ」を注目すると、古今集読人しらず歌で一例ずつしか見ないが、A項歌で七例と三例、B項歌で十例と五例、「わがせ」がB項歌に一例、「わぎもこ」は古今集では墨滅歌一例であるのに対しA項歌二例、B項歌三例ある。こうした語や「我」「我が」「君」を含む例はA項歌で三四首六一％、B項歌九十首四五％あって、より親密な訴えの度合が知られる。更に歌の結びに「……君」とする歌は、古今集になく後撰集と拾遺集に二首ずつあるのに対して、「……我が背・我妹」等を含め五十首ほど万葉集にあるが、A項歌に二首、B項歌に八首ある。このように万葉集寄りの相聞の世界を映す歌の少なくないことが認められるのである。

七　おわりに

古今六帖の出典未詳歌の中で古歌と思われる歌を選び出し、その特徴を見てきたのであるが、B項歌に個性味のある歌もあるが、万葉歌の語句、発想を受け継いで、類歌を多く見る相聞歌が主なものとなっている。新たな歌を生み出そうとの、時代の推移が向かう必然は、ごくゆっくりしたもので現れている。というのも、歌が実生活の場での男女をとりもつ実用、あるいは興趣のなぐさみにとどまっていて、傑出した歌を詠む歌人を生み出す要件である、時の文化が求める強い力を欠いていたからであろう。歌にかわって漢詩文が所を得ていた。思い合わされるのが、古今集真名序の言である。「好色の家には此を以ちて花鳥の使となし、乞食の客は此を以ちて活計の謀となすことあるに至る。」

想いをたくましくすると、伝承過程で変化した万葉歌、もしくは類歌の多い古歌は、歌をなりわいとしたこの大道芸人の口により、聞く人々の耳に入りやすいものとして読み替られ、読み出され、六帖まで伝えられた、そうした歌も混入しているのかも知れない。

B項歌一覧

第一帖名越の祓96　初秋09（重二里55）と10　照る日43と46　秋の月91　かすみ05　雪65と69　雨32　火56　かげろふ99と00と01

第二帖山32と33と89　山どり99と01と02　鹿13　山川33と38　関02と03と04　原11と13　岡18と19　森28　社41′（大観なし41の次）　秋の田94　雑の野20　大鷹33　小鷹37おちの王女　小鷹狩60家持　国18と22　郡45　里54と（55）　車82　馬87と91　鐘98

第三帖水14と15　水鳥34　魚72　鯛81　鮎83　川87と95と02と05と30と32と36と37　蛙56と59　橋67と68　ゐせき80と81（重五わする12）と83　池21（重六こも53）　にはたづみ76　瀬01　海05　あま27　しほ39と43　しほがま50山口女王と51と53　舟73沙弥満誓と82と83　釣87と89　藻01と03　浜千鳥86　崎95

第四帖おもかげ14坂上郎女（重五我がせこ47笠女郎　ないがしろ75（重五相思はぬ75）と76　たむけ48　旅58と75　かなしび36

第五帖言ひはじむ91　としへていふ03　初めてあへる21人麿と22と23と28（相思はぬ75）　わきて思ふ85と86と87　人に知らるる33人麿　夜ひとりをり35　ひとりね52　二夜隔てたる03　物へだてたる09（重六山吹61）　日頃隔てたる15と16　年隔てたる23　宵の間44　物語49　近くてあはず57　人をまつ77と78　待たず82　人をよぶ90　人つて07　忘る（12）と13　昔あへる人64　ちぎる77　人をたづぬ86　めづらし90と91　たのむる99　ちかふ10と12　人妻26と30　思ひやす42と45と46　くれどあはず73　人をとどむ91　（とどまらず99）　我がせこ（47笠女郎）と50　かみ15と19　玉の緒49と50と52貫之　玉だすき63と64　枕83　手枕92と97　衣12と16と17と23　塩焼衣33　秋の衣43　ひも87と89と96と97と00　おび06　笠01　紅29と30と31と32と37と41　糸78と81

第六帖（山吹61）　しの薄56と57　こも52と（53）と54と57と58　かや34　浮草82　たで13　あぢさゐ56　しほり73　まゆみ89　梅92　桜58　つつじ51　岩つつじ53　山ちさ67　うぐいす53　時鳥64　千鳥98と00　しぎ14と15と16　さぎ22と23と24

注1　作者注記の一一八とは連ね歌四十に平安朝歌人の名で示される七八を加えたもの。右上の細字は重出の数を示す。合計は倍の数となっている。つまり、四六首にわたって重出している重出歌としては二三首である。又、人麿等の万葉歌人の名で示される歌は、作者注記に入れるのではなく、A～D（主としてAB）にふりわけた。

例外として、B項に一首だけ貫之注記の歌があるが注記の誤りと見る。

注2　表四に従うと古今集「古来の旧歌」とB項歌が同じ資料から取られた確率は、多く見積っても12／85＝一四％で、同一資料によるとは考えにくい。

なお、表二～四の連接について〝あと・さき〟を考慮外とした。万葉集の歌が決まって先に置かれているのでなく、後にある場合もある。ナシというのは、歌題の最初にあるか、最後にある場合に当たる。

注3　「古今集の枕詞」有精堂日本文学研究資料叢書『古今和歌集』

（昭和58年12月1日受理）